

キリスト教学研究室紀要

第 8 号

—論文—

キリスト教と聖書翻訳の問題

芦名 定道 (1)

—研究ノート—

プロテスタンティズムと世俗化社会との関係への一考察

森喜 啓一 (15)

矢内原忠雄の朝鮮観

山中 健司 (27)

『国家と宗教』第4章における南原繁のナチス論
—「政治的浪漫主義」を手掛かりに—

塩川 礼佳 (53)

宗教言語論としてのサリー・マクフェイグの隠喩神学

澁谷 遊歩 (79)

—書評—

ヴォルフハルト・パネンベルク著、佐々木勝彦訳『組織神学 第一巻』

西村 一輝 (95)

あとがき

(137)

2020年3月
京都大学キリスト教学研究室

2019年度・第二演習の記録

<前期>

4月 9日：芦名定道「オリエンテーション」、「現代科学とキリスト教思想——人格概念の再考」（『キリスト教学研究室紀要』第7号、掲載）。

5月 7日：波勢邦生「大正生命主義と賀川豊彦」

5月14日：平出貴大「P. ティリッヒの宗教哲学における宗教の根源への問い——信仰における確実性と懐疑の関係を巡って」

5月21日：渡邊蘭子「博士論文の構想 および情欲についてのまとめ」

6月11日：谷塚巖「博論の進捗状況と今後の作業の見通し」

：香西信「ヨハネ福音書に見られる派遣者と使者との関係——8章18節を支える根拠として」

6月18日：山中健司「矢内原忠雄のキリスト教信仰と朝鮮（1）——十字架と朝鮮救済」
：リチャーズ・ティエリ「現在東京丸の内におけるローマ書 1:18-2:16 の聖書的意味」

6月25日：森喜啓一「ピーター・L・バーガーの研究」

：加藤良輔「揭示による現実解釈の変革的統一——H・R・ニーバー『啓示の意味』第3-4章の議論の整理

7月 2日：森川甫「論文の構成 ジャン・カルヴァン『共観福音書註解』における救いの教理の展開」

：塩川礼佳「南原繁のナチス論における国家の宗教の展開——『国家と宗教』第4章を中心として」

7月 9日：澁谷遊歩「科学的メタファー論の宗教的メタファー論への応用可能性——ソスキースの『メタファーと宗教言語』を手がかりに」

7月16日：西村一輝「W・パネンベルク『組織神学 第Ⅱ巻』における「場の概念」の理解のための一考察——論文『創造と近代科学』における議論を手がかりに」

7月23日：南裕貴子「ヴァルター・フライターク「伝道の神学」の周辺」

<夏季・大学院生研究発表会>

2019年

8月30日：日本基督教学会・日本宗教学会における個人研究発表予定者による予行演習。

<後期>

- 10月 4日：芦名定道「オリエンテーション」、「事典から見えるもの現代日本における殉教論と歴史的記憶」
- 10月22日：平出貴大「博士論文の構想について」
- 10月29日：渡邊蘭子「Concupiscentiaの用法／Caroの意味」
山中健司「矢内原忠雄の「日本的基督教」における三つのエートス——聖書信仰、「国体」観念、日本精神・神道批判」
- 11月 5日：谷塚巖「「あれか-これか」と決定論の否定——キルケゴールの倫理思想の文脈」
- 11月12日：ブラジミロブ・イボウ「パヴェル・フロレンフスキイの思想から見た人間の救済」
：香西信「M.V.Novenson *Christ among the Messiahs* を読んで——パウロのキリスト論の先行研究とキリストのメシア性に関する議論を中心に」
- 11月19日：森喜啓一「ピーター・L・バーガー研究進捗状況と今後の方向性」
波勢邦生「『賀川豊彦の終末論』」目次試案」
- 11月26日：加藤良輔「歴史的・宗教的相対主義と告白的神学——H・R・ニーバー『啓示の意味』第1章における神学の方法論」
- 12月 3日：塩川礼佳「D.Bonhoefferの初期思想を研究するために」
：澁谷遊歩「サリー・マクフェイグの隠喩神学」
- 12月10日：山中健司「矢内原忠雄のキリスト教信仰と朝鮮（2）——十字架と朝鮮救済」
西村一輝「「偶然性」を通してみるマルチバースの考察——「PDS」との接続に向けて」
- 12月17日：リチャーズ・ティエリ「聖書テキストの意味：人間の意思であるべきかそれとも神の意思であるべきか」
：南裕貴子「フライターク「伝道の神学」における伝道地の文化変革についての考察」

<春期・大学院生研究発表会>

2020年

3月：中止（日本基督教学会・近畿支部会 中止のため）

あとがき

◆『キリスト教学研究室紀要』第8号をお届けいたします。京都大学キリスト教学専修（研究室）刊行の「研究室紀要」も、2013年度の創刊から、今回で第8号を迎えました。紀要第8号を無事に刊行できたことについて、執筆者、そして編集担当者に心から感謝申し上げます。

◆京都大学のキリスト教学研究室は、教員と大学院生を中心に構成された研究者の研究共同体として運営されているが、そこで取り組まれる研究テーマは多岐にわたっている。構成員（大学院生）が実際にどのような研究を行っているかは、本号に収録された「2019年度・第二演習の記録」に記載された通りである。

◆この「研究室紀要」は、キリスト教学研究室の研究内容を広く公開するとともに、所属の大学院生に論文などの執筆機会を提供することを目的としている。査読体制の確立など、創刊当初からの懸案事項が存在するものの、当面は、大学院生の研究論文、研究ノート、書評に加え、教員（常勤と非常勤）や課程終了者による研究論文を掲載することによって、研究論集としての十分な水準が確保されるよう心がけたい。

◆2019年度のキリスト教学専修から、下記の通り、学部卒業生2名、博士後期課程指導認定退学者4名が学生の身分を離れることになる。今後の研鑽・飛躍を期待したい。

・卒業論文：石井絢子「現代の遺伝子操作をめぐる諸問題とキリスト教」

高須萌衣「キリスト教と性的マイノリティーをめぐる諸問題」

・指導認定退学者：波勢邦生、平出貴大、南裕貴子、渡邊蘭子

なお、2019年度の予餞会（2月29日）は、新型コロナウイルス感染への対応のため、前半の研究発表のみの開催となった。

なお、2020年度は、3名の学部生、3名の修士課程入学者、2名の博士後期課程編入者を新たに迎える。昨年度に続き、キリスト教学専修の構成メンバーは大きく入れ替わることになる。また、2020年度は4月より、津田謙治准教授が着任される。2020年度からのキリスト教学専修の新しい展開にご期待いただきたい。

◆近年の課程博士学位取得者のうち、次の3名が2020年4月より、諸大学に就職されることとなった。須藤英幸（東京基督教大学）、堀川敏寛（東洋英和女学院大学）、洪伊杓（山梨英和大学）。おめでとうございます。ご活躍をお祈りいたします。

◆本紀要は、研究室のホームページ、あるいは京都大学学術情報リポジトリにおける公開を中心としており、基本的には電子ジャーナルとして企画されている。一定部数の印刷製本も行われるが、それは必要最小限のものとなる。電子ジャーナルとすることによって、キリスト教学研究室の研究活動が研究室外の方々に広く知っていただけるならば、幸いである。

2020年3月 キリスト教学専修・教授 芦名定道

The Annual Report on Christian Studies

VIII

CONTENTS

Article

Christianity and Bible Translation Issues

ASHINA Sadamichi (1)

Notes

A Consideration on the Protestantism and The Secularized Society

MORIKI Keiichi (15)

The View of Korea of Tadao Yanaihara

YAMANAKA Takashi (27)

Shigeru Nambara on the Nazi in the Forth Chapter of *The State and Religion*: A Study
in the Context of “Political Romanticism”

SHIOKAWA Hiroka (53)

Sallie McFague’s Metaphorical Theology as a Theory of Religious Language

SHIBUTANI Yuho (79)

Book Review

A Book Review on Wolfhart Pannenberg’s *Systematic Theology* I . translated by
Katsuhiko Sasaki.

NISHIMURA Kazuki (95)

Afterword

(137)

March, 2020

Faculty of Letters, Kyoto Univeristy, Department of Christian Studies

Kyoto Japan